

『 猿になった男たち』

マダガスカルの上世界へ』

38 代 OB 田口 学

隊員構成：マダガスカル遠征隊

田口学(隊長、渉外)、田中彰(副隊長、装備、医療)

香川史郎(ビデオ撮影、食糧)、木村幸司(撮影、会計)

期間：1997年9月20日～12月15日

遠征地：マダガスカル島北東部マサアラ半島熱帯雨林

目的：

1. マダガスカルの上で咲く蘭の採集
2. 蘭と共生関係にある蝶などの生態観察
3. 上での行動目標として、30日間の上生活とその間に1000mの上移動を達成する

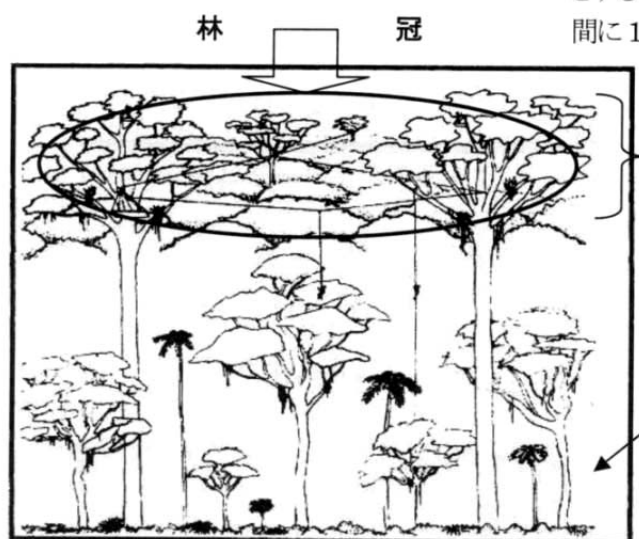


熱帯林の木の上部は、枝と葉の層となっている。真上から見るとブロッコリーのようにモコモコとしている。その部分を樹冠という。

1997年9月関西空港を発した、マダガスカル遠征隊本隊は、マダガスカル島北東部の厳正保護区の熱帯林にて、乾季から雨季へと移ろうとする季節の中、30日間の樹上生活と、その間に1000mの樹上移動を達成し、林冠部で

の滞在と移動方法に関西大学探検部独自の「関大メソッド」を確立した。

その間、熱帯林で50種類以上の蘭の採集にも成功した。全ての種類のサンプルは、マダガスカル首都アンタナナリブのチンバザ動植物園に保存されている。複数種類のサンプルが取れたものは、京都大学博物館にも保存されている。



熱帯林断面略図

その一本の樹冠が林立すると、林冠と呼ばれる層となる。世界の生態系の3分の2が熱帯林に住むといわれるが、その大部分はこの熱帯林の林冠に住んでいるといわれている。

私が、出会った大阪市立大の研究者は、マダガスカル固有の鳥を研究していた。鳥たちは樹冠に巣をつくり、林冠を飛んでえさをとる。研究者たちは、対象の鳥を同定し、その鳥が100回採餌するまでずっと追跡調査をするという。何ヶ月もの間、彼らの執念の追跡は、地上から30m 彼方の林冠を飛ぶ鳥をずっと頭をもたげて走り回るのが実態だった。対象物の多くが生息するその林冠という空間で、動物たちを追って自由に行き来し、必要あらば樹冠にいつまでもとどまって観察を続けたい。それが彼らの念願であり、夢でもあった。

「過去に例のないことをやりたい」という思いが原点だった。「最強のメンバーで、パイオニアワークをやる」を合言葉に田口、田中、香川の3名で95年の夏には遠征の構想を練り始めていた。

10年前だってそこに行くだけで「探検」といえるような場所は、有り余る大金を持たない限り、もはや思いつくものはなかった。マダガスカルにまず場所を定めたのは、世界地図の上でその島影を目にしたからだだった。一度目にとると、その存在感が際立つのがアフリカ大陸の脇にあるこの島だ。「なんかあるで、ここ」感に満ち満ちている気がした。徹底的にこの島を調べた。1回生で入部してきた木村を加え、翌96年に第一次マダガスカル行を経て、11月によりやく隊のコンセプトが樹上計画に定まった。実にそこまでに1年以上の時間がかかっている。それ

も、OBの水野さんが「お前ら、熱帯林の地上を歩くようなおもしろい真似すんな、樹上を歩いてみる」と、酔っ払って言ったのがきっかけで方向性がついたのだ。

この樹上を歩いて踏破するという発想が、すなわち、最前線の熱帯林研究の方法論につながることを知る。

当時世界では、樹上空間への4つの方法でアプローチがなされていた。どれもが非常に大きな資本を必要とする大規模なプロジェクトであった。たとえば、当時最も成果をあげていたのは、京大がボルネオ島で行っていた Tree Tower と Walk Way という方法だった。やぐらを組んだ複数の突出木間に、人が一人歩けるぐらいの橋を渡し、林冠部の動植物の観察を可能にする方法論。このプロジェクトを推し進める求心力だったのが、京大理学部の上田民二教授であった。氏は学生時代、京大探検部にいたという。とても気さくに、ひょっこり現れた我々の話を聞いてくださった。

「関大探検部では、マダガスカルを舞台に、林冠を行動する方法論と樹冠を生活空間とする方法論を試そうと企画しています。その核は、樹上から樹上への自由点への移動です。それを可能にするために、ザイルを用いた SRT の技術を駆使します」。

京大プロジェクトをはじめ、先進の方法論は、あらかじめ決まった範囲内の固定点間、もしくは固定範囲内での行動の自由だった。それに対し、より樹上で方向性を選択する自由度が高く、行きたい方向へどこまでもザイル＝林冠部の道を伸ばしていくことが我々の目的であり、かつ、それだけに特定の樹木への負荷は小さく、また、体力はかなり使うが、コストのかからないものだった。樹上生活についても、幹と枝の



樹上技術は、洞窟技術の応用

又からつるした樹上テントを作って樹上で数人の食住を可能にさせるつもりだった。素性もよく分からない他大学の学生がやってきて、こんなことをやたらと熱心に話し出したのだ。しかし、すでに熱帯林研究で国際的に名高かった井上先生は、馬鹿にしたようなところは微塵もなかった。兄貴のような話し方だった。「よし、そこに具体的な目標を定めよう、1ヶ月の樹上滞在期間中に1kmの樹上移動をする、でどうや。それだけできたら、いつまでも居れるし、どこまでも行けるということや」と。

京大の「芦生演習林」を樹上の合宿地に紹介してもらった。毎週末の関大社会学裏の大樹を使ったミニ合宿とともに、芦生の森が遠征隊を生んだ母なる地だった。

樹上の技術開発に天才的な発想力を発揮してリードしたのが田中だった。ボウガンの矢に釣りのリールを取り付けて飛ばし徐々にザイルに架け替える方法や、堅穴洞窟用の SRT 技術

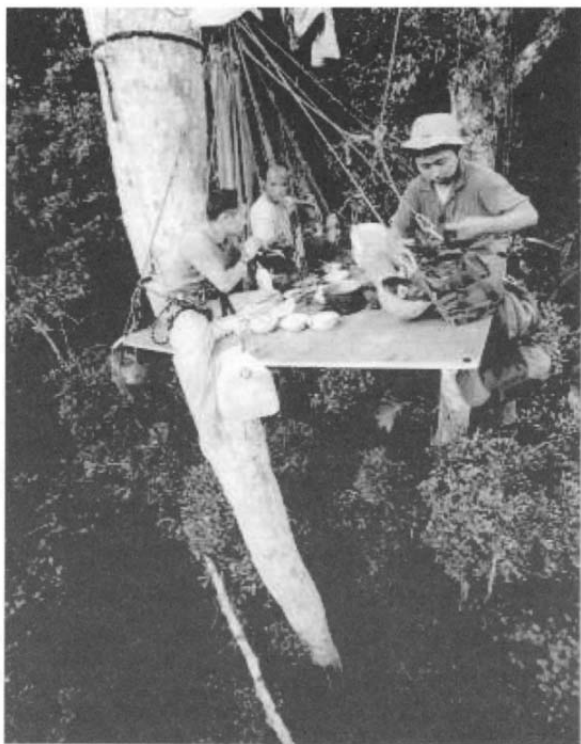
を林冠の横移動に応用したり、人だけでなく荷物を移動させるプーリーを用いた貨物輸送の方法論も彼が全て考案して、他の隊員を鍛えた。樹上テントに至っては、東急ハンズでほぼ全ての部品を買ってきて、その独創で組み合わせて自作した。完成版は第4号テントだった(3号までには、夜の芦生の森で、いきなり寝込みを襲われるようなつぶれ方も経験した)。とにかく、準備段階での田中の活躍は目覚しかった。こんなに何でもできる職人は、当時のどの探検部を探してもいなかっただろう。

マダガスカル熱帯林は、樹上のでっぺんまで約40m。原生林で、植生は豊かだ。隣合う木々全てが違う種類の樹だといっている。胸高幹周りが2m以上の樹木もザラだった。林床から見える樹上空間に、樹上に着生する蘭が確かにわずかに見えた。夢に見たマダガスカル熱帯林。荷物を担ぎ上げるだけで精一杯の初日、テン場を開くこともできず、隊員は少し見通しの開けた台地で、三々五々眠りについた。熱帯林の野宿は、気をつけないと耳の中に蟻など小虫が入ってくると聞いた。それを恐れながら、シュラフのチャックを閉め、深い眠りについた。

まだ夜が明け切らない未明だった。遠いところで何かの音がする。だんだん、目覚めてきた。音というよりも、異様な叫び声だった、雄叫びかもしれない。近くに気配はないが、われわれに向けて集中的に浴びせているようだ。シュラフの中から顔を出すと、まだ薄暗い中、何かのシルエットが樹上を飛ぶ。それが、原猿と言われる、マダガスカル固有の原生種の猿の群れだった。彼らの空間に入ったわれわれ遠征隊合計7人(マダガスカル

ル人側隊員3名)への威嚇行動だったのだろう。うつろな意識の中、まだ朝靄がかかった静かな熱帯林を裂く叫び声。それは、劇中の真ん中で目覚めたかのような、映画のワンシーンを見るような朝だった。

マダガスカル人隊員への技術訓練や、地形偵察に費やした数日の後、ようやく行動が始まった。一人1週間の完全樹上滞在期間を受けもち、その間は絶対に地上には降りない。それを4人の日本人隊員でまわす。樹上には、ローテーションでほかに3人を配置する。地上の支援隊員は3人。ボウガンでターゲットにした次の木を狙い釣り糸付きの矢を飛ばす。地上との連携でザイルを伸ばし、fixして次々に移っていく。



樹上30mの生活。自作のテントで炊事、排泄も全てこなし。鳥の声は間近、とても気持ちいい

テントもたたんで、荷物輸送用のザイルにセットし、林冠を移動させる。一日の行動目標は平均30m強を稼ぎたい。たったの30m。朝5時から行動を開始して、夕方暗くなる直前までずっとザイルで木にfixされた状態で木から木へのザイル延長班と荷物・テント輸送班とに細分化しながら、尺取虫のような遅々とした動きが続く。

夜は、樹上で3人がテントに寝る。テントは、2m×2mサイズ。3人用としての広さには別段問題はなかったが、樹上のテントというのは、根本的な不安が尽きない。熱帯林の巨木とは、大地に根ざした不動の存在のように思われるだろう。しかし、違う。風に結構なびくのだ。そのため、樹上30m前後に張っている(吊るしている)テントは大きな揺れでローリングする。おまけに、熱帯林の木々は、地表に堆積する養分を奪い合う生存競争が激しく、養分層は薄い。そのため根を地中深く張るのでなく、地表に浅く広く張る。意外なことに、熱帯林の木は倒れやすくもろいのだ。実際に、巨木がドーンと横

倒しになって、そこにGapと呼ばれる空白が星空に向かって開いているのを何度か見た。生きていた木が収まっていた分の空間が抜けているのだ。

「この木が倒れることはないのか?」「倒れたら、助かるのか?」、不気味な無言のイメージに眠気が飛ぶ。雨が降ってくると樹上テントにもフライをかけて雨をよける。しかし、雨をはじく音がまた不気味だ。シトシトなんて降らない。形容するなら、ザ、ザ、ザーだ。これがフライを打って、テントの中でこだまする。「この雨が地表の養分堆積層を流してしまわないか?」「ただでさえ、吸収が早く薄い地表層がさらに薄くなったら、いよいよ倒れるのか?」、誰も言葉にはしなかった。ただ、気になる連想は頭を駆け巡るのだ。24時間ハーネスに巻かれ、命綱をとり、靴を履いたままシュラフに入る樹上の生活。日本で技術を徐々に習得した探検部隊員と違い、マダガスカル人隊員には、完成した技術を現地で教えこむ形となった。マダガスカルへの樹

上研究技術の移転というのも、この隊が厳正保護区にて計画を行うための許可の条件になっていた。マダガスカル人隊員の技術の飲み込みは早かった。しかし、体の底から彼らが慣れるまでには時間がかかるもの。日の浅いころは、テントで就寝中にいきなりガバッと跳ね起きて、無意識にテントの外へ飛び出そうとしたこともあった。そのたびにあわてて抱きかかえて起こしてやらねばならなかった。

行動日が10日を超えるころ、視線の先に樹上を颯爽と走り去っていく昼行性の原猿が見えた。同じアイルレベルで見ると、野生の走りは腕や腿の筋肉の躍動がはっきりとし、目を奪われるカッコよさ。人間たち



移動する2木間の最大距離、40m。1日の平均距離移動距離は30m前後

の動きは対照的だ。2日連続で朝から大雨にたたられた時は、ボウガンの矢と釣り糸に湿気がつき、微妙な重さが異なるのであろう、全く狙いどおりにいけなくなった。矢がかかっても雨で重くなった糸が切れることもある。ザイルがつかからないものだから、木の上で動くことさえできず、雨に打たれ続けるも2日で5mしか進めないこともあった。

常に小さな「動」を繰り返し、1日にたった30m稼ぐのさえ、昼飯もたびたび忘れる忙しい行動の毎日だった。マダガスカル的林冠で、いわばノルマに追われるとは滑稽な探検なのかもしれない。樹上だけではなく、地上でも通過した木を含む5m×5mのグリッド線を引き、さらにその両横にもうひとつずつ5m×5mグリッドを作り、高低差を簡易測量器具で読みながら作図し、その範囲内の樹木をプロットした。全員が大真面目に自分たちの探検にこだわり、役割を果たした。

行動30日目、つまり、樹上生活30泊目、ついに林冠に作った樹上の道は、1006mを数え、隊の行動目標を達成した。

そして、1ヶ月という樹上での生活の積み重ねが象徴的な形になって現れた。樹上でご飯を炊いて、レトルト食品をかけて食事をしていたわれわれのテントには、当然のことながら生活臭が漂った。いつのころから、夜中に生き物の気配を次第に身近に感じるようになってきた。樹冠での生活を重ねる日々をじっとどこかの樹冠から見ていたのだろう。日を追うごとに近づいたその影が、やがてはテントで寝るわれわれの

体の上を走り去っていくようになり、ついには手から手へ食べ物をとるまでになった。樹上からすさまじい叫び声で原猿が威嚇してきたのは、たった1ヶ月前の初日の朝のことだった。そして、我々は今、このように樹冠の隣人になった実感がした。原猿たちによって、俺たちは鈍いけれど、猿の世界に暮らす新たな新人類にでもなったのだ。

この遠征計画に明確な指針を与えてくれた師匠ともいべき井上民二教授は、先発隊員となった木村が単身関西空港からマダガスカルへ向けて出発した、その同じ日、研究地であるボルネオ島へ向かう飛行機の墜落により事故死された。1997年9月6日、享年49歳。ご冥福をお祈りいたします。

また、本当に多くの協力者・後援者に恵まれ成り立った遠征計画でした。ここにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(38代OB)

樹上テントにやってきた原猿。原猿を長年研究する京大教授も、この写真には驚いていた

